

高品質・安定生産に向け、中耕・培土や排水対策、雑草対策を徹底しましょう。



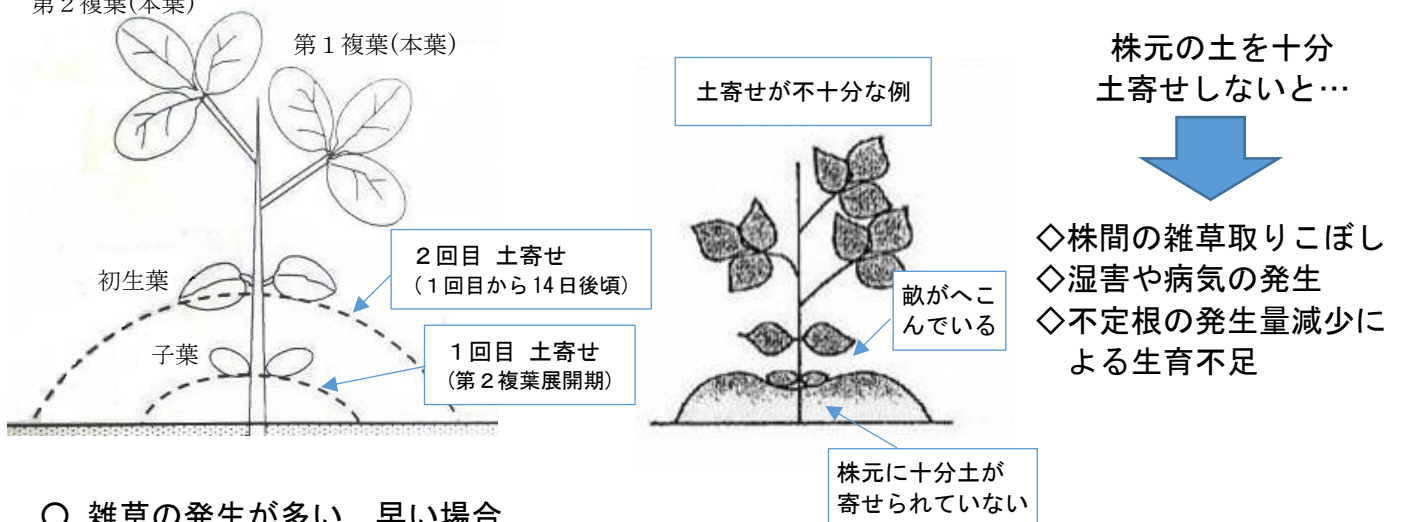
## 1 中耕・培土のめやす

	大豆の生育	は種後日数	時期		培土の位置
			5/30 は種	6/10 は種	
1回目	本葉2枚目展開頃、主茎長12~15 cm	20~25 日後	6/19~24	6/30 ~7/5	子葉節まで
2回目	本葉5枚目展開頃、主茎長(地際から)20~30 cmくらい	35~40 日後	7/4~9	7/15~20	初生葉節まで

## 2回目の培土は、開花期前（7月20日頃）までに終了しましょう

- ・開花期以降の中耕・培土は、根の切断による生育へのダメージが大きく、生育抑制や落花・落莢を招く恐れがあります。
- ・畝立ては種を行っているほ場でも、中耕の除草効果が期待できるため必ず行いましょう。
- ・やむを得ず1回で終了する場合は、初生葉節の株元まで培土し、雑草を埋没させましょう。

第2複葉(本葉)



株元の土を十分土寄せしないと…



- ◇株間の雑草取りこぼし
- ◇湿害や病気の発生
- ◇不定根の発生量減少による生育不足

### ○ 雑草の発生が多い、早い場合

早めに1回目の中耕・培土を実施しましょう。

### ○ 作業適期に降雨が続くと予想された場合

可能な限り前倒しで中耕・培土を行いましょう。

### ○ 出芽が不ぞろいの場合

生育の早い大豆に合わせ、中耕・培土を行い、培土の高さは低めにしましょう。

## 2 排水対策

- 中耕・培土後は、地表水が1日以内に排水されるように、畝間の溝が周囲明きよと連結し、排水がスムーズになるよう、溝が土塊でふさがれていないかなど点検・整備を行いましょう。
- 大雨のあとは、河川の安全を確認した上で、排水路・ほ場内排水溝の点検・整備を行きましょう。

### 3 雑草防除

- 大豆生育期の雑草対策は、「中耕・培土」の徹底が基本です。茎葉処理除草剤は、中耕・培土で残った雑草対策の補助的手段として使用しましょう。
- 降雨が続く等、培土作業が遅れ、雑草多発が懸念される場合は、除草剤を適正に使用し、雑草防除を行いましょ。
- ほ場に発生している草の種類（イネ科雑草、広葉雑草）に応じて最適な薬剤を選定し、遅れず散布しましょう。除草剤を畦間に散布する場合は、飛散防止カバーを利用し大豆に付着しないよう注意しましょう。

○ 帰化アサガオ類の発生被害が増えているので、確認されたほ場では適切に防除して被害を減らしましょう。

○ 防除には除草剤と中耕・培土等を組み合わせた体系防除が必要です。また、まん延防止のために、農道や畦畔の管理を徹底し、種子の増殖を防ぎましょう。

○ 帰化アサガオ類は春から秋まで長期にわたって出芽します。「つる化」すると防除が困難になるので、中耕・培土や薬剤防除などを組み合わせ、概ね2～3週間毎に防除を行いましょ。

詳しい対策は普及センターにお問い合わせください。

参考文献「帰化アサガオ類まん延防止技術マニュアル(農研機構 中央農業総合研究センター)」

### 4 害虫防除

#### ○ アブラムシ類

直接の吸汁害の他に、ウイルス病（褐斑粒の原因）を媒介します。葉の表面にアブラムシの吸汁による黄色い斑点等の発生に注意し、葉裏や未展開葉に多く寄生していた場合、速やかに防除を実施してください。



#### ○ フタスジヒメハムシ

発生は年4回で、幼虫の被害は根粒を加害し、莢数の減少や子実が小粒化することで収量が低下します。成虫は、葉や莢を加害し、多発すると生育の悪化を引き起こします。また、莢への加害は、黒斑粒を発生させ、品質が低下します。

種子塗沫剤を処理を行えば、生育初期の防除は不要です。しかし、生育期に成虫が多発生した場合は、薬剤防除が必要となります。

## 大豆収量 300kg/10a に向けてのポイント

大豆の多収栽培（300 kg/10a）に向けて、生育量の確保と下位分枝の早期確保が重要です

多収栽培となる生育量の目安（5月末～6月上旬は種）

は種後 50 日（開花期前）：主茎長 32cm 以上  
分枝数 9 本/m<sup>2</sup>以上

中耕・培土、排水対策を徹底して  
目標収量を確保しましょう！

